

「現場のOR教育」

研究部会の活動状況

榎本 久徳

企業のOR教育の特集号ということで、現在われわれが進めている「現場のOR教育研究部会」の状況を報告し、皆様からのご意見をいただきたいと思えます。

現場の人にORに親んでもらうためには、あるいはORを使ってもらうためには、どうすればよいかを考えよう、ということでこの部会は1983年3月、9人の委員でスタートした。

第1回目の会合では、ORの普及には限界があるのではないかという意見、また逆に、企業内ではORと意識しないで多く適用されており、今さら、という意見もあったが、裾野を広げることは大切で、現場の人にORを手軽に使ってもらえるような教育を考えようとの意見の一致をみた。

当初、部会の委員の属する企業、団体で行なわれているORの社内教育、雑誌などに掲載されている社内OR教育の調査からはじまった。社内教育の多くは、社内のORワーカーの育成、社内へORを普及させるために、多くの部門から人を集めた教育、社内にORのシンパを作るための教育などいろいろあるが、それらは、手法を中心にしておいて、その後、例題あるいは受講生がもち寄った問題を、ケース・スタディとして扱い、ORの考え方、進め方を教えるものが多いようであった。

また、統計を含めて、ORの手法と呼ばれているもので、社内（現場）で使われているものについて、どうして使われるようになったか等々、委

員のあいだで議論を進める中で、パソコンの普及の波という機会も加味して、次のような方針で教材をつくってみることが提案された。

- (1) 手法の説明はしない
- (2) パソコン用のプログラムをつくり、データを入れれば答が出るようにする。
- (3) データの入力方法は、手法指向型ではなく問題（適用業務）指向型とする。
- (4) 企業内の例題をできるだけ多く集め、それらをパソコンを使って解くことを教える。
- (5) 例題を適用分野別に分け、そこから手法（プログラム）へ進むようにする。
- (6) パソコンでの小規模な問題には飽き足らなくなる人のための指針をテキストにつける。

ここしばらくは、このような方針のもとで教材づくりを進めることとし、第1次案として作成する教材に盛り込むものは、委員の数などの制約から次のものとした。

線形計画法、待ち合せ理論、在庫管理、予測、多変量解析、基本統計

現在、これらの手法について、どの程度の問題まで扱えるようにするか、使い勝手をどのようにするか、などの議論を続けながら教材づくりを行っている。

このような方針でつくられた教材による、現場の人に対する教育の効果はまったく未知であるが、現在作成中の教材ができあがった段階で小規模な講習会を行ない評価をしたうえで、研究部会の終了（1985年2月）としたいと考えている。なお現段階（1984年3月）で、できあがっているものは、

線形計画法に関するもの
待ち合せ理論に関するもの（一部）
多変量解析に関するもの（一部）

である。

「現場のOR教育」研究部会の連絡先

名古屋市港区大江町2（〒455）

三菱自動車工業株式会社生産管理技術部 上田恭嗣（幹事）

Tel. 052 (611) 7111